

七
生
説

(丙辰幽室文稿) 安政三年四月十五日(一八五六) 二十七歳

天の茫茫たる、一理ありて存し、父子祖孫の綿々たる、一氣ありて属く。人の生まるるや、

斯の理を資りて以て心と為し、斯の氣を稟けて以て体と為す。体は私なり、心は公なり。

私を役して公に殉ふ者を大人と為し、公を役して私に殉ふ者を小人と為す。故に小人は

体滅し氣竭くるときは、則ち腐爛潰敗して復た収むべからず。

君子は心、理と通ず、体滅し氣竭くるとも、而も理は独り古今に互り天穰を窮め、未だ嘗て

暫くも歇まざるなり。

余聞く、「贈正三位楠公の死するや、其の弟正季を顧みて曰く、『死して何をか為す』と。

曰く、『願はくは七たび人間に生れて、以て国賊を滅さん』と。公欣然として曰く、『先づ

吾が心を獲たり』とて耦刺して死せり』と。噫、是れ深く理氣の際に見ることあるか。是の

時に当り、正行、正朝の諸子は則ち理氣並び属く者なり。新田、菊池の諸族は氣離れて理通

ずる者なり。是れに由りて之れを言はば、楠公兄弟は徒に七生のみならず、初めより未だ嘗

て死せざるなり。是れより其の後、忠孝節義の人、楠公を觀て興起せざる者なければ、則ち

楠公の後、復た楠公を生ずるもの、固より計り数ふべからざるなり。何ぞ独り七たびのみな

らんや。

余嘗て東に遊び三たび湊川を經、楠公の墓を拝し、涕涙禁ぜず。其の碑陰に、明の徵士朱生の文を勒するを觀るに及んで、則ち亦涙を下す。噫、余の楠公に於ける、骨肉父子の恩ある

に非ず、師友交遊の親あるに非ず。自ら其の涙の由る所を知らざるなり。朱生に至りては則ち海外の人、反つて楠公を悲しむ。而して吾れ亦生を悲しむ、最も謂れなし。退いて理氣の説を得たり。乃ち知る、楠公、朱生及び余不肖、余不肖を資りて以て心と為す。則ち氣属かずと雖も、而も心は則ち通ず。是れ涙の禁ぜざる所以なりと。余不肖、聖賢の心を存し忠孝の志を立て、国威を張り海賊を滅ぼすを以て、妄りに己が任と為し、一跌再跌、不忠不孝の人となる、復た面目の世人に見ゆるなし。然れども斯の心已に楠公諸人と、斯の理を同じうす。安ぞ氣、体に随つて腐爛潰敗するを得んや。必ずや後の人をして亦余を觀て興起せしめ、七生に至りて、而る後可と為さんのみ。噫、是れ我れに在り。七生説を作る。

解説

楠木正成の精神が、朱舜水に、また自らの内にも伝わり生きていることを実感した松陰は、そこから精神の不滅を確信し、これを理氣の説でもって説明する。そして楠公その他の優れた人々と理を一にしている自分の精神を、七生の後の人々までもこれを受け継ぎ奮い立つて欲しいものだと願う。彼は幽室に「三余読書」と「七生滅賊」を座右の銘として掲げて自らを励ましていたが、「七生説」はその頃の松陰の人生觀を示すものとして重要である。

用語解説

七生説 Ⅱ この世に七たび生まれ変わって国恩に報いると云う説。

天の茫茫たる、一理在りて存し Ⅱ 果てしなく広がる大宇宙は一つの理（陰陽を働かせる力）によってこのように存在している。

父子祖孫の面々たる、一氣ありて属く Ⅱ 父子祖孫は一つの氣（宇宙万物を生成する靈氣）によって絶えることなく続いている。宋の儒学者、程伊川・朱熹などが唱えた説で、宇宙は理と氣とから成ると考え、万物は陰陽の交錯によって生じ、陰陽は氣であり、陰陽を働かせ作用させるのが理であると説いた。

斯の理を資りて以て心と為し、斯の氣を稟けて以て体と為す 〓 宇宙の理(陰陽を働かせている力)をもとにして

心をつくり、宇宙万物を形成している靈氣をもとにして体をつくる。

体は私なり、心は公なり 〓 体は特定のものであり、心は普遍的なものである。

大人 〓 徳のある、立派な人。

小人 〓 つまらぬ者。

腐爛潰敗ふらんくわいはいして 〓 腐り、破れ亡びて。

君子は心、理と通ず…未だ嘗て暫くも歇やまざるなり 〓 才知の優れた君子は、その人を

動かす心が理(陰陽を働かせる力)と通じるものがあり、身体が消滅し、氣(宇宙万物を生成する靈氣)が尽き果ても、理だけは昔から今に至るまで天地のように極まりなく、しかも、しばらくその活動をやめたことがない。

楠公 〓 楠木正成。一二九四〜一三三六。南北朝時代の武將。建武の新政に、摂津・河内・

和泉の守護となる。新政失敗後、足利尊氏の軍を一旦九州へ敗走させたが、その後再度東上兵庫湊川に迎え撃って戦死。

欣然 〓 喜ぶさま。

吾が心を獲たり 〓 私の心になっっている。

耦刺くわしして死せり 〓 二人刺し違えて死んだ。

新田 〓 鎌倉末期、嫡流の新田義貞は後醍醐天皇に応じ、鎌倉を落とし入れ北条氏を滅ぼしたが、建武政権で足利尊氏と対立。のち、一族は南朝方として各地で戦ったが滅亡した。

菊池 〓 二代武時は元弘の乱に鎮西探題北条英時を博多に攻めて討死。後、その子孫は数台に亘り南朝に属し征西將軍官を奉じ活躍したが、南北朝合一の後には衰え、戦国時代になって大友氏に滅ぼされた。

忠孝節義の人 〓 主君に忠義、親に孝行を尽くし節操の堅い人。

興起 〓 奮って立ち上がること。

湊川 〓 神戸市の中部を流れる川。下流一帯で湊川の戦いが行われた。

涕涙 Ⅱ なみだ。

朱生 Ⅱ 朱舜水。一六〇〇〜八二。明末の朱子学者。名は之瑜、字は魚璵、舜水は号。明が滅んで日本に帰化し、水戸の徳川光圀に仕えた。湊川の楠公碑に「嗚呼忠臣楠木之墓」と揮毫。徴士は、学徳が高く、朝廷・幕府から招かれながら官職に就かない人。

勒する Ⅱ 銘文を石に彫り付ける。

海外の人 Ⅱ 外国の人。

余不肖 Ⅱ 余は松陰の自称。不肖は謙遜して云う言葉。

一跌再跌 Ⅱ 跌はつまづくこと。一度ならず二度も失敗すること。

面目の世人に見ゆるなし Ⅱ 世間の人々に合わせる顔がない。

安んぞ気、体に随つて腐爛潰敗するを得んや Ⅱ どうして、その靈気や身体が消滅するに随つて、その心が、破れ滅びてしまうことがあるうか。

[吉田松陰の名文・手紙を読む【目次】](#) [ページへ戻る](#)

[吉田松陰.com](#) [トップページへ](#)